

MSC メラビア・地中海クルーズ(その6)

事務局長 池田良穂

マルタ島を夕刻に出港して、次の寄港地のバルセロナ(スペイン)に到着するまでは、1日の終日航海日でした。

ただ、この終日航海では、筆者にとって貴重な2つの体験がありました。1つはマルタ島を出港した後、船上で急病人がでて船がマルタ島に一度引き返したことです。もうひとつは海が結構荒れて、17万総トンの巨体の波の中での運動性能が知れたことでした。

マルタ島を出港して1時間ほどしたときに、ちょうどレストランで食事をしていた時に、船が急に傾きました。ちょうど夕食中で、5階のレストランの窓の半分が完全に海だけが見える状態になり、反対側の窓からは空だけが見えました。一瞬、なにか大事故?と思いました。が、次第に船の傾きが直った頃、ブリッジからのアナウンスがあり、急患がでてマルタ島に引き返すとのこと。すなわち大きな横傾斜は、船が高速でUターンしたことによる横傾斜だったことがわかりました。船舶の復原性を専門の1つとしていた筆者にとっては、これは、この船の復原性の特性を知る貴重な体験でした。ちょっと小さな傾斜における復原力が小さすぎるのではと、同船に乗船して以来、なんどか感じたからでした。しかし、幸いなことに横傾斜はUターンが終わると同時に収まり、マルタ島で病人を下した後すぐに出港して、船は予定よりスピードを上げて航海を続けて、バルセロナへの到着は予定通りの時間でした。

2つ目は、航海中、海がけっこう荒れたこと。キャビンのTVのクルーズ情報では、風速は一時17m/sにまで上がり、ビューフォート階級は8にまでなりました。小さな縦揺れを起こしてサンデッキのプールには波がたち、ときどきパンチングのドォーンという音と、「ぐらっ」とする横揺れを感じました。船酔いをする乗客は見かけませんでしたが、夜のサーカス公演「シルク・ドゥ・ソレイユ」は中止になったので、それなりの揺れだったのでしょう。ワイヤーで吊り下げよう出し物が多いだけに船の揺れには敏感なはず。

さて、こんな体験はありましたが、船内ではたくさんの乗客がクルーズそのものを楽しんでいました。各種のイベントが繰り広げられ、サンデッキのプールは日光浴をする人々で大混雑でした。このクルーズでは子供連れの乗客がとても多くて、欧州においてもクルーズが高齢者だけのレジャーからは若い世代のレジャーに変容しつつあることを実感しました。また、日本人、中国人等がたくさんフライ&クルーズで欧州でのクルーズを楽しむようになったという実感ももちました。クルーズプラネット、阪急交通、ジャンボツアー、JTBなどクルーズ販売に力を入れる旅行会社の団体客が乗船しており、中には100人単位のグループもあり、日本語のメニューも用意されていました。ただ日本語のわからない外国人の船員さんに、日本語だけでクレームをつけて怒鳴り散らしている「困ったおじさん」もいましたが・・・。

MSCクルーズは、日本発着のMSCスプレンドィダで経験済みでしたが、欧州でのクル

ーズに乗っていろいろと違う感想も持ちました。これについては、おいおいまとめて、皆さんの意見も聞きたいと思っています。

次回のレポートは、待望のバルセロナです。欧州での現代クルーズの成長に伴って、一気にクルーズハブ港としての存在感を増している港です。



① 終日航海日の午前中は、まだ白波はたっていませんでしたが、船首でくだける波が白く泡立つようになってきました。波がではじめた兆候です。



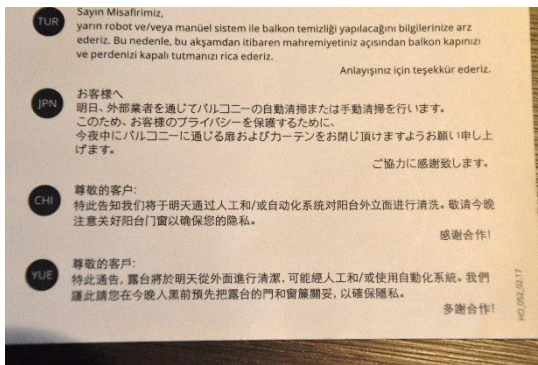
② 船尾にあるパノラマレストランの窓からみた航跡です。静かな海での航海より幅が広くなり、外側の形が変形しているのは船首に波があたった影響です。



③ 終日航海日に唯一出会った客船の姿です。コスタクルーズの船のようでしたが、スマホが繋がらずにAISが使えないため、船名の確認できませんでした。



④ MS メラビアには丸窓が結構多用されていますが、外が歪んで見えるのが気になりました。いくつも並ぶと歪んだ水面が不連続になって違和感があるのと、近くの海面の動きべつべつに見えて不思議でした。



- ⑤ 外国船の場合に、日本語訳がされている場合がありますが、時々、意味が違っている場合があります。この船の窓が汚れていることを先のレポートで指摘しましたが、定期的な窓の清掃は行われているようで、部屋に「明日、外部業者を通じてバルコニーの清掃を行います・・・」との案内が入りました。「外部業者??」と不思議に思って、英語の原文を読んできると、「外から」、すなわち「部屋には清掃員は入らず、外側から入って清掃するので、中が見えないようにカーテンを閉めてください」というお願いでした。ちっちゃな誤訳が気になる性格を直した方がよさそう!!